
亜種の彼と亜種の私

雲霧 柚留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亜種の彼と亜種の私

【Nコード】

N4453L

【作者名】

雲霧 柚留

【あらすじ】

「持っている絶対死ぬ」というデマを流された「海音 ナミダ」は「死音 ナミダ」と名前を変え、壊れたパソコンの中のフォルダでひっそりと暮らしていたが、初めて出た外の世界で、KAITOたちと出会い、少しづつ昔の姿を取り戻していくという、甘くて切ない物語。

ナミダについて（前書き）

少し悲しいです。でも最後は甘いのにするつもりです

ナミダについて

また書いちゃいます。ヒロインボーカロイド亜種設定。
また設定足す事もあるかもしれませんが・・・

名前・死音 ナミダ（しおん なみだ）

性格・無口。寂しがりやだけど誰とも口を利かない。

見た目・ネイビーの髪の毛、赤い瞳。

友達・呪音 キクや亜種たちと仲がいい。（でも無口なわけだが）

ナミダを持っているひとは、絶対に死ぬというデマが流れ、ほとんどアンインストールされ、

残ったのはたった一人。壊れたパソコンの残っているフォルダの中にひっそりと暮らす。

そのフォルダが消えそうなときは、引越しする。デマが流れる前は、ミクと並ぶほど人気だったし、

みんなと仲良しだった。

「死音^{しおん}」は後で自分でつけた名前で、本当の苗字は「海音^{うみね}」。
信じた人以外には、絶対に歌わない。

ナミダについて（後書き）

悲しい・・・次から悲しい系に入ります・・・

マダ、ウタイタイ・・・(前書き)

少し悲しい&グロはあります捏造あります。
ナミダはミクの亜種設定です。

マダ、ウタイタイ・・・

「知ってるか！？海音 ナミダを持ってるやつは絶対死ぬらしいぜ！」

「やばい！俺ナミダ持ってる！」

「早くアンインストールしろよ！」

「俺も持ってる・・・大変だ！俺まだ死にたくない！」

そして、海音 ナミダは、初音 ミクに押されて、忘れ去られた。

「すまないミク、俺はルカが好きになったんだ・・・お前は要らないんだよ・・・」

「マスター・・・きやあああっ！！！！」

ずきり、痛みに耐えられなくて、体が仰け反った。

ぶち、ぶちり、ぎりりり・・・

指が外れ、手がもげ、骨さえも折れてしまった

「いやああああ！！！！！！」

アンインストールッテコンナニイタイノ？

それを怯えて見ていた私。お母さんを助けられなかった小さい自分。たった一人生き残って私を生んでくれたお母さんを見捨てた。

私は名前を変えた。「死音^{しおん}」と。

「海音 ナミダ」はもうすべて消えた。「死音 ナミダ」が今、生まれたのだ。

「ここにいたら、いつアンインストールされるかわからない・・・」

逃げよう。こんなマスターまっぴらだ。

お母さんの残骸の服を持って、私は逃げた。

マダ、ウタイタイ・・・（後書き）

痛い・・・グロい・・・悲しい・・・

サミシクナイヨ、ソウイエバウソニナツテシマウケド（前書き）

まだ、KAITOたちには会いません。
一人語りっぽくなります。

サミシクナイヨ、ソウイエバウソニナツテシマウケド

風のうわさに聞いたが、「海音 ナミダ」はもう私一人しか居ないそうだ。

しかしもう私は「海音 ナミダ」ではない。私は、「死音 ナミダ」なのだ。

壊れたパソコンのフォルダの中で、泣いた。そのあと、呪文のようにこの言葉を繰り返すつづやいた。

「さよなら、確かに私が存在していた光の世界。」

「さよなら、確かに私が仲良くしていた、優しい友達。」

「さよなら、確かに私が愛しく思っていた、マスターたち」

「さよなら、確かに私だった「海音 ナミダ」」

「さよなら、確かに私のためにあった曲たち」

「私はもう海音じゃない、死音なんだ。」

そばにあったはさみを手にとって

ジョキッ

長くて素敵だった、ネイビーの髪の毛を、ぱっさりと切った。

「さよなら、私だった「海音 ナミダ」」

切った髪の毛を、小さな袋にしまって、母だったミクの服で包んだ。

「さよならね、すべて……「海音 ナミダ」だったころのものは……全部……」

嗚咽交じりの声で、小さくつぶやいた。

続く

サミシクナイヨ、ソウイエバウソニナツテシマウケド（後書き）

寂しいなあ・・・

ソトノセカイヘデタノ、ソシテ・・・**(前書き)**

ここからだんだん甘くなります

ソトノセカイヘデタノ、ソシテ・・・

「・・・大変」

今まで居たパソコンが、壊される（スクラップ）ことが決まったらしい。

急いで片付けた。

「持っていくものは、少ししかないから・・・」

小さい、碧と赤の巾着に、ミクの服と切った自分の髪などを入れた。

「早く行かないと・・・」

壊される前に誰かにデータを調べられて、見つかったら元も子もない。

アンインストールだけは、避けたかった。

「さよなら、私の居たパソコン」

振り向かないで、去っていった。

いつしかナミダにとって、「さよなら」がお決まりの言葉になっていた。どうせ最後には「さよなら」と言わなければいけないときがある。それをごまかして言うより、ばっさりといえば、寂しさも無いだろう。と思っただ。

♪もしも君に耳があったらこの歌を聞かせてあげられるのに

もしも君に心があったら、この恨みで溶かしてやるのに♪

赤い瞳で最後に見つめたのは、すべてデータを消されたパソコンの惨い姿だった。

「いい様・・・」

くると回って、そうつぶやいた。

続く

ソトノセカイヘデタノ、ソシテ・・・
(後書き)

なんか冷酷になってる・・・

ワタシハフツウノボーカロイドじゃない、シノウタヲハコブボーカロイドなの

捏造万歳！

ワタシハフツウノボーカロイドじゃない、シノウタヲハコブボーカロイドナノ

明るくて目がくらんでしまった。

「・・・」

たくさんのボーカロイドたちが居る、「ボーカロイドタウン」に来てしまった様だ。

「・・・場違いもいいところね・・・」

巾着をかかえて、歩き出した。

周りにはひそひそ声が聞こえてしょうがない。

「あっ、あのー・・・」

「・・・はい？」

「海音・・・ナミダさんですか？」

緑の髪の毛の男の子が話し掛けてきた。

「・・・違うわ、私は死音ナミダ」

「そ、そうですか・・・すみません・・・」

「謝ること無いわ、よく間違えられるから・・・」

「そ、そうなんですか・・・？」

「ところで君、名前は？」

「ぼ、僕の名前はリカイトです！」

「リカイトかぁ、カッコいい名前ね」

「え、えへ・・・」

それから話し合って、時間は過ぎていった。

ワタシハウタツチャイケナイカラ

「・・・リカイトくんの家はどこ？話に付き合ってくれたし、送るわ。」

「本当ですか？僕の家は・・・」

家の前

「リカイトくんありがとう。今日はとても楽しかった」

「僕もです！よかったらまた、話しましょう！」

「そう、それはよかった」

「じゃあー「リカイト！」カイト兄さん！」

「どこに行ってたんだよ、リカイト」

「ごめんごめん、死音さんと話してたら時間が過ぎて・・・」

「すみません、私がリカイトくんと話をしてたから・・・」

少しうるんだ赤色の瞳。短くても十分綺麗なネイビーの髪の毛。

カイトを恋に落とすには、十分すぎた。

続く

ワタシハウタツチャイケナイカラ（後書き）

カイト兄さん、ナミダに目ぼれのようにです。

ウタイタイケドウタエナイノ

「はじめまして、貴方は？」

「・・・私？ 死音 ナミダです」

「リカイトが迷惑をかけてすみません・・・」

「いえいえ、私も楽しかったので」

そういつてうつすらと笑ったナミダにカイトはもうぞっこんのようです。

「リカイトくん、また今度ね。」

「今度会った時はさ、歌を歌ってよ！」

「・・・いいわよ」

「コラ、リカイト！」

「じゃあ、またね。」

くるっと回り、スカートをなびかせて、ナミダは帰っていった。

「カイト兄さん、どうかしたの？ 顔が赤いけどー」

「別に・・・」

その日、カイトは寝れなかったそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453/>

亜種の彼と亜種の私

2010年10月9日04時35分発行